Institute of Human Culture Studies Otsuma Women's University

Newsletter

発行●大妻女子大学人間生活文化研究所

No.9
2018

CONTENTS

科研費と研究活動 PDCA …… 1
「科研塾」が開催されました …… 3
科研費新規採択課題を紹介します …… 3
電子書籍「Otsuma eBook」 …… 5
大妻女子大学　戦略的個人研究費 …… 6
人間生活文化研究所　研究費助成事業 …… 7
科研費 PDCA スケジュール …… 8
協賛企業 …… 8

科研費と研究活動PDCA

■ 人間生活文化研究所（以下研究所）の研究支援メニューをご存知ですか？

研究所では学内の研究者を支援するさまざまな研究費助成のためのサービスを提供しています。ご存知のOtsuma eBook、オンラインジャーナル『人間生活文化研究』、戦略的個人研究費（研究支援室と協力）、共同研究プロジェクト、研究員研究助成、大学院生研究助成などがその主なメニューです。

これらの研究支援メニューは直接研究者の研究活動を支援するだけでなく、つづいて科研費などの外部資金を獲得してもらうための呼び水的な性格も併せもっています。学内の研究者の方々には、これらの研究計画の立案と申請書の作成を通じて、外部の研究資金を獲得する際の“予行演習”をしていただくことを期待しております。「学内の競争的研究費の獲得から科研費の獲得へ」は研究所のみならず大妻の目標でもあります。

このために研究所では“科研塾”を時々開催しています。ここでは日本学術振興会等の科研費のエキスパートから時々改正される科研費申請に関係する最新の情報を提供するほかに、申請にあたっての重要なポイントの紹介や、科研費採択研究者の体験談などもお話ししていただくほか、個別の科研費申請に関する相談にも応じています。

大妻学院理事
大妻女子大学副学長
人間生活文化研究所長
博物館長
総合情報センター所長
大澤　清二

■「科研費」を軸にした研究活動PDCA

研究計画の申請書が採択されるには、専門外の第3者にもはっきりと計画の合理性が理解できるように申請書がつくられなければなりません。専門からやや離れた審査員が読んでわかるしっかりと練り上げられた研究計画が必要です。狭い範囲の専門家しかわからないような申請書では、新審査システムでは不採択になりやすくなっていますので１度読んだだけでも、はっきりと研究の輪郭が把握できる申請書であることが求められています。

科研費による研究活動はふつうは年次計画、月次計画（Plan）に沿って実施されるでしょう。計画に沿って研究活動がおこなわれれば（Do）、一定期間の後には研究の結果、成果が出てくるはずです。粗データしか収集できないときもあるでしょうし、立派な論文を執筆できるような結果が得られるかもしれません。どちらにしても何らかの成果は得られるでしょうから、それらの達成水準の程度は評価（Check）できるはずです。それを踏まえて次のフェーズに向けた研究計画を吟味し、修正した活動（Act）が続きます。簡単には、これが研究者に期待される研究のPDCAということになります。

筆者もこうした研究活動のPDCAサイクルを大学院を出たときあたりから廻してきた１人です。40年以上このPDCAを繰り返しています。このPDCAサイクルを廻す原動力になっているのが科研費です。今までにトヨタ財団や日本私立学校振興・共済事業団、厚生労働省、文部科学省などさまざまな関係の研究資金も使わせて貰いましたが、最も安定的に自由に研究できる資金としては日本学術振興会の科研費にまさるものはありませんでした。もし、科研費が採択されていなかったら、ガソリンの無くなった自動車のように運転不能に陥ったでしょう。常に研究活動サイクルを動かし続けるために科研費は不可欠でした。

もちろん、研究成果である研究論文を書くことは、廻り続けるPDCAサイクルの重要な1段階です。論文を書くための素材の整理や解析から執筆、図や表の作成、写真の選択を経ての論文投稿という作業も研究PDCAの一部分です。

ところが、残念なことにしばしば学位論文を書いた後で研究を中断してしまうとか、科学雑誌に論文が掲載された段階でほっとして小休止してしまうことがあります。せっかく研究活動エンジンが廻っているのを中断してしまうのです。これは非常にもったいないことです。１度切ってしまったエンジンを再始動するのは、PDCAを継続するよりはるかにエネルギーを要します。

（→次頁へ続く）

（→前頁の続き）

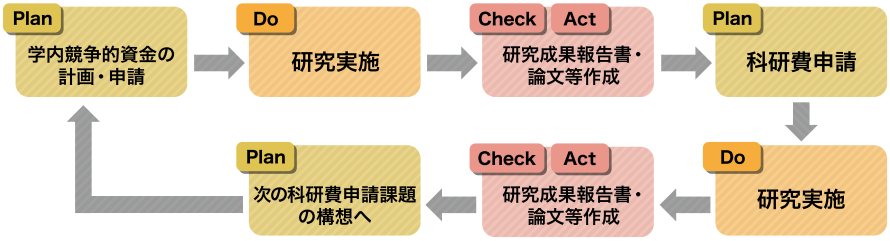
■ 研究成果の具体化に向けて

研究計画を構想し、申請書を作成し、めでたく資金を獲得し、計画的に研究活動を進め、その成果をまとめて論文を書くとともに科研費の成果報告をし、続いてその次のフェーズの科研費を構想する。この研究のPDCAサイクルを習慣化することを目指していただきたいものです。しかし採択率はだいたい20%程度ですから、採択されない課題のほうが多いわけです。不採択通知を受けたときには、がっかりするでしょう。もう申請したくないとも思うでしょう。せっかく時間をかけ採択を期待して提出した申請書が不採択になれば、落胆したり、不愉快になったりするのが人情です。然しそこで留まっていたのでは研究活動は停止してしまいます。研究活動に空白が生じてしまっては困ります。そのよう状況を少しでも支援し、研究を中断させない工夫が必要です。そのような状況にも対応できるように、本学では戦略的個人研究費や共同研究プロジェクトなどのメニューが用意されています。どうぞこれ等を利用して、捲土重来を期してください。

■ 大学院生の研究活動とPDCA

研究所では賛助会員からの寄付金をもとにして大学院生研究助成を実施してきました。この制度は大学院生たちが研究計画を立案し、助成金を受け、研究活動を行い、その成果を研究所が発行している『人間生活文化研究』に投稿する、ということでPDCAを体験してもらうことができるように設計してあります。今年度も41名の大学院生がこの制度を利用しています。

研究活動PDCAサイクルの例



■ 大学のブランドと科研費

近年では科研費の獲得は個人の研究者だけでなく、大学ブランディングのための不可欠な要素になっています。言うならばその大学の研究水準あるいは研究者、教員団の偏差値のように受け取られています。

時々発表される大学の“格付け”にはきまって科研費の獲得金額や採択率などが利用されていますが、本学は近年連続して“生活科学”の分野でトップクラスにおります。科研費の獲得水準は大学の研究の質の外部評価となっていますので、多くの大学は科研費対策を行っています。大妻女子大学はこの点にも留意し、大妻の研究水準を向上させることを目指しています。

まずは以下の諸点をお伝えし、皆様の科研費申請を期待しております。

1）しばしば受ける相談の中で、ご自分の研究分野が「すぐには役立たない基礎的分野であるから申請しても……。」といわれる方がいます。しかし科研費はすぐに役立たない研究、基礎的な研究、マイナーな関心でも良い、という自由度の高い研究助成です。ご心配にならずに申請してください。

2）「もし期間内に成果が出せなかったら、と考えると心配なので……。」というご心配も無用です。科研費による研究は期間内に達成できなくてもペナルティを課されることはありません。精一杯の努力をしていただければそれで結構です、というように非常に学問研究の自由を尊重した制度です。この点で成果が出なかったことに対して不寛容であったり、次回の申請は受け付けないというような研究費とは異なっています。

3）科研費の採択履歴は、その方の研究者としての研究能力を保証する指標、自立した研究者としてのベンチマークになっています。ですから「科研費を申請しようか、しまいか」と迷ったときには、研究者としての人生に対する覚悟が試されている、とでも思っていただきたいと思います。思い切って第1歩を踏み出してください。

4）そこで、申請にあたってまずは①募集要項を熟読する。②研究テーマを吟味し、時間をかけてじっくりと申請書を書く。③採択経験者に添削してもらうことをお勧めします。科研費は要らない、申請しない、研究資金が無い、では大学人としても研究者としても肩身が狭い時代になっています。

5）申請書の提出に当たっては、研究業績をきちんと記入しなければなりません。この箇所は申請した研究の実現可能性を判定する情報となります。もちろん専門の学会雑誌もよいでしょうが、時間がかかるのが頭痛の種です。多くの場合に、科研費のPDCAサイクルと、投稿から発行までが半年から1年半もかかる論文の公表サイクルとが、まるでシンクロナイズしないのです。この不便を解消するためにも短期間で論文を審査、掲載できる『人間生活文化研究』（International Journal of Human Culture Studies）を用意しました。電子ジャーナルですので科研費申請直前でも研究成果を公表できるわけで、この点でも本学はPDCAを廻しやすい環境ができています。ちなみにこの電子ジャーナルは、最近ではひと月に1000回以上は検索されているようですし、さらにJ-Stageにも掲載されますので、検索数は紙の媒体による雑誌をはるかに凌いでおります。研究成果を全世界に迅速に広く伝えることができます。

以上紹介しましたメニューを「大妻の研究」を前進させるためにお役立てください。

最終頁の「科研費PDCAスケジュール」を併せてご参照ください。

「科研塾」が開催されました

人間生活文化研究所では、大妻女子大学教職員、大学院生を対象に、研究支援室、総務・財務グループと協働で科学研究費助成事業申請講座「科研塾」を開催しています。

6月15日に開催された科研塾は、千代田キャンパスと多摩キャンパスを繋いだ同時開催となり、多くの方にご参加いただきました。

講師のお二人からは、〈科研費申請のポイント・戦略について〉と〈新書式にどう対応したら採用されやすいか、「科研費改革」による新書式への対策などについて〉をご講義いただきました。

次回の科研塾は7月26日（木）に千代田キャンパスで開催されます。

青江家政学部長の講義のポイント

- 書式が変わっても、「核心をなす学術的な問い」が明確であるかどうかが重要である。
- 学内の競争的研究費である『戦略的個人研究費』に採択されたことで、研究体制が整備されていた。それにより、申請書の研究方法の実現可能性が高いことがアピールできた。
- 申請書は、専門の研究者以外が読んでも分かるように記載をする。

大澤所長の講義のポイント

- 科研費の獲得は、教員個人のみならず、大学の外部評価に繋がるものである。学内の競争的研究費などのシステムを上手に活用して、研究水準を維持してほしい。
- 「科研費改革」があっても、申請書に必要なポイントや注意すべきポイントは、根本的に変わらない。研究課題・目的・方法は明確にすること。起承転結をつけること。募集要項を熟読し、申請書を作成した後は、必ず第３者・採択経験者に添削をしてもらうこと。
- 人間生活文化研究所では、申請の内容に関する相談や、専門家による申請書類の添削を随時受け付けている。

科研費新規採択課題を紹介します

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）は、人文学、社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピアレビューによる審査を経て、独創的･先駆的な研究に対する助成を行うものです。（日本学術振興会ホームページより）

平成30年度、本学では、新規採択課題9件を含む、全47件が採択されました。

本号では前号に引き続き、新規採択課題4件についてご紹介します。

研究課題　基盤研究（B）　H30-H32

経験的概念としての「ポジショナリティ」の実証的研究

〈研究代表者〉池田　緑
社会情報学部

近年、社会的係争や齟齬の過程、それらのポリティクスを分析する概念として、ポジショナリティが注目を集めています。ポジショナリティは、個人の自由意思で容易に変更することが困難な属性（国籍やいわゆる“民族”、性別などが典型）や、不可逆的な出来事による社会的立場など（暴力の加害者や被害者、支援者など）によって権力関係が発生し、それが個人的関係にも影響を与えうるような局面を分析する際に有用な概念です。このポジショナリティをどのように理解するか／しないかによって、さらなる係争や齟齬が頻出する可能性もあります。

一見、ポジショナリティは個人の自由意思とは無関係に存在しているように思えるため、否応なしに権力関係の中に位置付けられることへの拒否感が、ポジショナリティへの理解を妨げることも少なくありません。本研究では実際の係争や齟齬の事例を通じて、ポジショナリティに対する理解がどのように社会的関係を変え、新たな共通了解性を創出しうるのかを検討し、ポジショナリティを経験的概念として再構成することを目的とします。

日本と沖縄の関係、定住外国人・外国人労働者、性差・ジェンダー、社会階層、ヘイト言説、歴史認識、DV被害者支援、権力による身体管理、などの社会的局面の分析から、ポジショナリティ概念によって、当事者性や共通了解性がどのように整理されうるのか、事例研究、質的調査、量的調査を組み合わせて分析します。これらを分担者７名、協力者２名とあわせて、10名の研究組織で行います。その成果は国際学会やシンポジウムで社会に還元される予定です。

研究課題　基盤研究（B）　H30-H33

ミャンマー135民族の民族服製作技術の残存調査と技術学習過程の最適化方法論の開発

〈研究代表者〉下田　敦子
人間生活文化研究所

従来、東南アジアにおける伝統的民族服に関する研究はモノとしての服に焦点が当てられがちで、製作技術の保存、継承に関する研究は第二次的であった。伝統的技術の継承は（無文字社会故に）学習マニュアルも無く、親子の相伝（口伝と身体技法の模倣）で行われるために一通りの技術を修得するには10余年の期間を要し、さらに近年では学校教育の普及も手伝って家庭内での技術伝承の機会が激減している。近い将来には技能保有者は激減し、貴重な民族服文化自体が消失しかねないと危惧されている。そこで私たちは、学習マニュアルや文字資料の欠如を補い、修得するための最適年齢を求め、学習過程を教育科学的に合理化することによってこの難問を克服したいと考えている。本研究では、①ミャンマーの135全民族において民族服製作技能保有者と継承者・学習者が現時点でどれ程残存しているのか。②現存している製作技術はどのような技術であるのか。その技術を文字と映像で残し、民族服文化を残したい。③各民族の製作技術の学習過程に内包されている技術情報をIRT解析※して、これを学習者の年齢発達に沿った最適な学習過程に再編成してマニュアル化できないか。④家庭内伝承に代えて学校教育、職業教育で実現可能な教育科学的な合理性をもつ民族服製作と文化伝承の教育方法論を提案できないだろうか。―これらが本研究の学術的な命題である。

※IRT（Item Response Theory）解析はそれぞれの学修すべき項目（技術要素）の絶対的な難易度を計算することができる。技術要素の易しい順に配列することで最適な学習過程を編成する事に役立つ。TOEICなどにも応用されている。

研究課題　基盤研究（C）　H30-H34

学童期小児における運動器発達と食事・生活状況との関連

〈研究代表者〉上杉　宰世
家政学部

近年、学童期小児の運動能力低下や骨量低下による骨折が増加しており、2008年の骨折発生率1.57％は1970年の2.4倍であった。骨折の要因は、ただ単に手をついただけで骨折する子どももいるが、転倒回避能力の低下と運動器強度の低下が挙げられている。骨量は20歳代で最高値になるため、高齢期の骨折や骨折の重症化を予防するためにも、若年期に十分に骨量を増やしておくことの有用性が健康日本２１（第２次）にも掲げられている。特に小学生高学年から中学生の時期には、最大骨量の約1/4が蓄積されると言われているにもかかわらず、この期における骨密度に関する測定データはほとんどない。

体組成分析は、体脂肪、筋肉量、骨塩量など人間の体の組成を定量化するものであり、1996年に開発されたInBoby体組成分測定装置は、部位別測定と多周波測定が可能なため、身体の部位別に体水分量や筋肉量が評価でき、体型による誤差が少ないことから学童小児に適した測定方法である。このInBodyによる測定値から四肢骨格筋率を算出したものは、サルコペニア（筋肉低下に伴う骨折・運動機能の低下が生じる状態）の診断に現在用いられている。

我々は平成27年に小学生150名を対象として調査した結果、カルシウム摂取量、睡眠時間、運動実施時間が骨密度と相関のあることを明らかにした。また、平成28～29年度には都内小学校２校にて５、６年生を対象として約400名の骨密度と体組成成分の測定を実施し解析を進めているが、今後は科研にて研究を進める予定である。

研究課題　基盤研究（C）　H30-H32

子どもの権利の視点に立つNPOの支援構造と倫理的基盤形成のメカニズムに関する研究

〈研究代表者〉加藤　悦雄
家政学部

今子どもたちはたいへん厳しい状況で生きることを余儀なくされている。1990年代に自治体子ども計画による施策づくりが導入され、一見すると、子どもや家庭に関する法律や制度、サービスは格段に整備されてきたように見える。しかし、例えば子ども虐待相談対応件数、子どもの貧困率、いじめの認知件数、自他への暴力行為、子どもや若者の自死、さらに待機児童問題や消えた子ども問題など、統計的に見ても高止まりや悪化の状況を呈している。どうして、こうした一見すると矛盾するような事態が生じているのか。課題のとらえ方やアプローチの仕方に、何らかの死角があったのではないか。

本研究は、こうした課題の背景として、90年代以降の福祉ニーズ論／サービス供給論に依拠した子ども・子育て支援の推進と、それを誘因とするサービス本位の支援の拡大、並びに当事者を包摂するコミュニティの弱体化を想定する。そのうえで、もう一つの方向性として、「子どもの最善の利益」を主軸とする、子どもの権利論的アプローチに基づく子ども支援の方法論を追究することになる。

研究対象として、実際に子どもの権利の視点に立って支援を展開する子どもNPOの実践に着目していく。それらの子どもNPOでは、①子どもを主体とした関係づくりへの支援が、課題の捉え方から解決までの見通しに至るまで、どのような支援構造の中で展開されているのか。②子どもを主体とした支援、言い換えると他者に寄り添う支援を可能とする担い手側の倫理的基盤は、どのようなメカニズムによって形成されていくのか。本研究はこうした問いに応えていく。

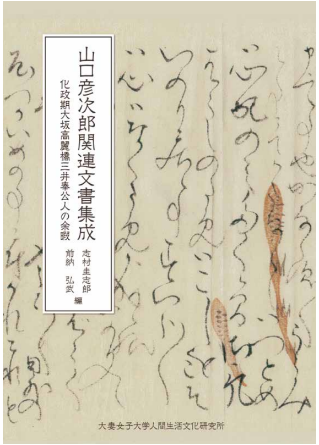
電子書籍「Otsuma eBook」

人間生活文化研究所では、電子書籍の出版を行っています。電子書籍ならパソコン、タブレット、スマートフォン等にダウンロードして、いつでもどこでも手軽に読むことができ、本棚のスペースをとらず、色あせることもありません。

また、印刷・製本・輸送費など、出版にかかる費用を大幅に削減することができます。欠品・絶版になるリスクもありません。出版された書籍にはISBNが付与され、ウェブサイト「Otsuma eBook」より世界中に発信されます。

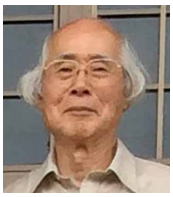
Otsuma eBook **Recommended Titles** ≫http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/

『山口彦次郎関連文書集成 －化政期大坂高麗橋三井奉公人の余暇－』

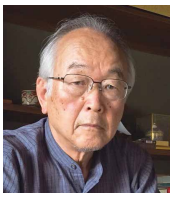


〈編著者〉志村圭志郎・前納弘武

〈発行〉2018年5月20日
〈形式〉PDF
〈ISBN〉978-4-907136-12-3



志村　圭志郎
郷土史・古文書研究家



前納　弘武
大妻女子大学
名誉教授
人間生活文化研究所
特別研究員

〈編著者のことば〉

文化文政の時代、大坂三井店に奉公に上がっていた山口彦次郎は、宣長の学統を継いだ大平とは年の離れた従弟で、その娘小武と相思の仲にあったが、多くの困難のため成就はならず、後志村家五代吉兵衛を襲名した。本書表紙は、小武より彦次郎宛の書簡の一部である。土筆の絵柄が美しい。幼少より三井に上がり成人した彦次郎が奉公の余暇を如何に過ごしたか、読者はその頃にタイムスリップしたいという思いに駆られるであろう。然しそれには健脚で且つ折々の事象に当意即妙に狂歌を操る教養が必須である事に気付かれるであろう。

大妻女子大学　戦略的個人研究費

大妻女子大学教員の研究活動の活性化・高度化、競争的外部資金への応募促進を目的とした助成制度です。助成の対象は、本学の専任教員による個人研究。平成26年に新設され、人間生活文化研究所は、本学研究支援室と協働して管理・運営に当たっています。

6月28日 授与式の様子

■ 平成30年度　学長要望課題「大学教育の改善に関する研究」（5件）

氏　名	所　属	研究課題
井上　俊也	キャリア教育センター	e ラーニングによるリテラシー教育の実践とブランドアクティベーションに関する研究
中川　麻子	家政学部	大妻コタカ著作集を中心としたデジタルアーカイブと教育への活用
松田　晃一	社会情報学部	画像認識・ＡＩによるマルチエージェント（ロボット）型講義支援システムに関する研究
矢野　博之	家政学部	大学教職課程におけるリフレクション・システムの導入とカリキュラム研究
深水　浩司	教職総合支援センター	ＩＣタグによる図書館内利用者行動情報収集に関する基礎実験

■ 平成30年度　一般課題（35件）

氏　名	所　属	研究課題
五十嵐　浩司	文学部	Disaster Reporting　のリスクマネジメントに関する研究
石井　雅幸	家政学部	科学の創造性を理解する小学校理科カリキュラムの開発研究
伊藤　みちる	国際センター	カリブ海における白人性の構築：ジャマイカとトリニダードの比較研究
上野　優子	人間関係学部	初動負荷理論を用いたトレーニングの導入
榎本　恵子	文学部	ルイ 14 世のイメージ製作―芸術と政治の関連性の検証―
小川　浩	人間関係学部	国際協力における効果的なジョブコーチ研修の開発
清原　康介	家政学部	心停止の発生場所情報を含む網羅的院外心停止データベースの構築と分析に関する研究
小泉　恭子	社会情報学部	音楽メディアの変遷が聴取に与えた影響に関する研究
甲野　毅	家政学部	緑地保全活動の生理的な効用
小清水　孝子	家政学部	女性アスリートの利用可能エネルギー不足アセスメントツールの開発と妥当性の検証
小関　右介	家政学部	温帯島嶼における河川魚類多様性の理解と保全のための大規模環境ＤＮＡ観測
小林　実夏	家政学部	青年期タイ人・日本人の体格による生活習慣の違いについて
小治　健太郎	家政学部	若年女性における隠れ肥満・痩せとエネルギー代謝関連因子およびサーカディアンリズムとの関係
須藤　良子	家政学部	沖縄の染織品に関する調査研究―アジアの絣織物とのかかわりを中心に―
炭谷　晃男	社会情報学部	コミュニティ再編に伴うコミュニティ・スクールの役割変容
髙木　元	文学部	スタンフォード大学東アジア図書館蔵「集古画本〔読本挿絵集〕」の書誌学的研究
高波　嘉一	家政学部	健常若年女性における食後高血糖のメカニズムおよびその原因の究明
武田　千夏	比較文化学部	思想と芸術の接点：スタール夫人の『コリンナ』
田中　優	人間関係学部	ボーイスカウトの教育効果に関する研究３
團野　哲也	家政学部	貝紫の染色機構に関する研究―古代の天然染料を現代科学で探求する―
趙　方任	国際センター	留学生向け日本事情教材の研究及び作成
福島　哲夫	人間関係学部	心理療法における肯定的介入の効果検証のための実験研究
古市　孝義	人間関係学部	介護福祉現場におけるケア・ハラスメントの実態
細谷　夏実	社会情報学部	「海育（うみいく）」の取り組み：小学校における食と連携した新たな海洋教育の提案
本田　周二	人間関係学部	成人期以降の友人関係の機能と適応との関連
牧野　智和	人間関係学部	学校建築についての社会学的研究
正村　俊之	社会情報学部	AI および IoT の社会的哲学的研究――社会情報学基礎論の新展開
松村　茂樹	文学部	近代日本における書画文墨趣味ネットワークの形成
武藤　哲郎	短期大学部	マキューアンのダンケルクの描写における事実と虚構
森　功次	国際センター	理想的観賞者説の拡張をつうじた日常的美的経験論の構築
八城　薫	人間関係学部	職場におけるイヌ（セラピー犬）介在の社会的・心理的効果の検証
山倉　健嗣	社会情報学部	企業―ステイクホルダー関係における媒介者の機能と正当性に関する研究
山蔦　圭輔	人間関係学部	摂食障害予防のための基礎的研究１
吉井　健	家政学部	オムニチャネル環境下における消費者の購買行動とファッションマーケティングの研究
延　恩株	キャリア教育センター	「日本語の表現と韓国人の理解度――その差異から日本人の思考様式を探る基礎的研究」

人間生活文化研究所　研究費助成事業

大学院生研究助成

本学大学院の教育・研究を高度化、活性化することを目的とする助成制度です。この制度は、人間生活文化研究所の協賛企業からの賛助金により運営されています。7月4日、採択者を対象に事務説明会を開催しました。

■ 平成30年度 大学院生研究助成（A）　採択課題（5件）　　対象：人間文化研究科　博士後期課程在籍者

氏　名	所　属	研究課題
飯田　さやか	言語文化学専攻	古今和歌集注釈書における竹取説話
伊藤　陽子	人間生活科学専攻	歯科と管理栄養士との協働効果に関する研究
小野　友紀	人間生活科学専攻	保育園における園児の判断による食事摂取量と家庭の食事量との関連
佐藤　祐子	人間生活科学専攻	病院管理栄養士の栄養相談スキル評価方法（評価表）確立の検討
鹿野　美由紀	言語文化学専攻	平安時代貴族女性の正装　――裳唐衣装束の着用について――

■ 平成30年度 大学院生研究助成（B）　採択課題（36件）　　対象：人間文化研究科　修士課程在籍者

氏　名	所　属	研究課題
石原　果奈	言語文化学専攻	リーディング・ストラテジーの活性化と長文読解におけるその効果
上田　ひかり	言語文化学専攻	平安文学における尼生活
江部　優奈	臨床心理学専攻	セルフ・コンパッションが自己嫌悪感場面における自己形成に及ぼす影響
大屋　理香	人間生活科学専攻	幼児の造形における道具を使う技術の習得プロセスと表現について
金井　正美	臨床心理学専攻	イヌの介在による社会心理学的影響と心理臨床場面でのイヌ介在効果の可能性の検証
上坂　緑	臨床心理学専攻	一般臨床群における心理相談室への被援助中断に関する探索的研究
栗田　みどり	現代社会研究専攻	人間味のある出生前診断を目指して
栗山　恵弥	人間生活科学専攻	ショウガオールが骨格筋細胞の代謝および運動機能に与える影響
纐纈　琴音	人間生活科学専攻	マウスのコレステロール代謝におけるパラミロンの用量反応
神山　ルリ乃	臨床心理学専攻	初心者セラピストにおける終結―喪失反応に注目して―
坂上　幸	言語文化学専攻	「人間失格」者の〈語り〉をめぐって――太宰治「人間失格」を中心に――
白鳥　快枝	言語文化学専攻	「紫式部日記」の記述を基に考察する後宮及び斎院サロンにおける文学活動
鈴木　恵	人間生活科学専攻	酸性飲料による酸蝕歯発生リスク評価法の確立とアルカリイオン水によるエナメル質再石灰化促進効果の検討
須藤　優希	臨床心理学専攻	グループ活動における居場所感の変化および精神的健康との関係性
関根　京子	人間生活科学専攻	行動変容の継続性に関する検証
髙橋　未香	現代社会研究専攻	精神保健福祉士取得後の研修制度に関する一考察～専門職としての資質向上の責務～
武富　理沙子	言語文化学専攻	「大和物語」からみる婚姻と居住形態
田中　有沙	臨床心理学専攻	女性同性愛者のアイデンティティ形成について―異性愛主義の視点に注目して―
田向　優	臨床心理学専攻	青年期の自己愛傾向が友人のつきあい方に及ぼす影響
樋田　琴乃	臨床心理学専攻	首尾一貫感覚向上のための心理教育プログラム開発研究
萩原　千晴	人間生活科学専攻	若年女性の骨格筋に関する研究 ―サルコペニア―
福田　沙織	人間生活科学専攻	摂食嚥下困難高齢者の食事と腸内細菌叢の関係に関する研究
藤田　歩美	臨床心理学専攻	カウンセラーの介入の違いが反芻・省察思考に及ぼす影響に関する研究
不破　未貴	人間生活科学専攻	大麦品種 BARLEYmax の摂取が食餌性肥満モデルマウスの腸内代謝に及ぼす影響
星野　優芽	人間生活科学専攻	乳児の非言語的な感情の表出に対する保育者の関わり
松ヶ瀬　美歩	人間生活科学専攻	新聞記事から読む「アイビーファッション」の社会的受容　テキストマイニングを通じて
松下　千原	人間生活科学専攻	和服着用時における日常動作美の解明
三尾　建斗	人間生活科学専攻	マウスを用いた大麦摂取による糖代謝・脂質代謝に関する腸管―肝臓―脂肪組織のクロストーク解析
毛利　英美子	人間生活科学専攻	特定保健指導において管理栄養士に求められるスキルに関する研究
桃﨑　沙耶	臨床心理学専攻	映像視聴によるストレスマネジメント効果の検証
森　由香子	人間生活科学専攻	間質性膀胱炎患者の食事指導教育ツールにおける満足度に関する検討
守屋　早希子	人間生活科学専攻	平織布「銘仙」の特徴と魅力の解明
山口　千晴	臨床心理学専攻	代表的パーソナリティ障害の独自性とオーバーラップの背景要因の検討
山田　真衣	言語文化学専攻	後置修飾の理解を促す指導法
横田　安依	人間生活科学専攻	若年女性の体型や食行動の変化を促す食育手法
米澤　夏生	臨床心理学専攻	親子関係の相性が摂食障害傾向と境界性パーソナリティ障害傾向に与える影響

科研費PDCAスケジュール

～人間生活文化研究所が行う科研費獲得支援～

	科研費		科研費申請講座「科研塾」	戦略的個人研究費
	日本学術振興会	研究支援室	人間生活文化研究所	研究支援室 人間生活文化研究所
平成30年度				
4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月	●9月1日(予定) 公募	●9月下旬頃締切 教職員を対象に「平成31年度科研費申請の有無についてのアンケート」を実施 ●10月中旬 研究支援室における科研費申請の締切 科研費応募書類をチェック	●7月26日 第4回「科研塾」 「科研費」最近の動向 ●10月3日 第5回「科研塾」 申請直前講座 科研費申請の個別相談は随時受け付けています(面談・E-mailいずれも可)	申請者 平成30年度の申請 審査結果(コメントなど)を受け「平成30年度戦略的個人研究費申請書」の練り直し 「平成31年度科研費研究計画調書」の作成 研究内容の見直し 平成31年度公募情報公開
平成31年度				
4月 5月 6月	●4月初旬(予定) 交付内定通知 ●4月下旬(予定) 交付申請書提出 ●6月下旬(予定) 交付決定	●4月初旬(予定) 「研究活動スタート支援」公募 (初めて「研究者番号」を取得する方対象)	●4月1日 第1回「科研塾」 新任教員の方向け ●5月(予定) 第2回「科研塾」 科研費申請に向けて ●6月(予定) 第3回「科研塾」 科研費獲得に向けて	●4月(予定) 平成31年度公募 ●6月下旬頃(予定) 平成31年度採否通知

【協賛企業】 人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいています

前田建設工業株式会社
清水建設株式会社
ダイダン株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社九電工
山崎製パン株式会社
株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社オカムラ
富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
キユーピー株式会社
東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行
SMBC日興証券株式会社
株式会社中村屋

(順不同、平成30年7月現在)

大妻女子大学人間生活文化研究所
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地　大妻女子大学図書館棟6階
Tel: 03-5275-6047　Fax: 03-3222-1928　E-mail: info@o-ihcs.com
HP : http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/

▶ ニューズレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。

※ このニューズレターは、全国の大学・大学院、企業研究所、研究助成団体、官公庁などの関係機関に、およそ1,900部発送し、配布しています。